

Śāntarakṣita の abhāva 批判

島 義 徳

Śāntarakṣita は Tattvasaṅgraha¹⁾ において Kumārila の Abhāva 論²⁾ を取り上げ批判している。この批判について、Kamalaśīla の Pañjikā にしたがって検討を試みたい。

Śāntarakṣita は、まず Kumārila の見解を次のように紹介する。「实在の様相において、五種の認識手段 (pramāṇa) が实在の有の理解のために生じない場合、非存在 (abhāva) が認識手段である。(ŚV 1) (k 1647) Kumārila は知覚、推理、類推、証言、要請、非存在の六種の認識手段を認めている。Bhāṭṭa 派によれば、实在 (vastu) には有 (sat) を特徴とする存在 (bhāva) と無 (asat) を特徴とする非存在との二種があり、あらゆる対象は有と無との二つの様相をもっている。实在の様相、すなわち实在の無と言われる様相において、知覚に始まり要請に終る五種の認識手段は生じない。なぜならば、それらは实在の有の様相の理解のためのものである。従って、实在の無の様相、非存在が認識対象 (prameya) である場合、非存在が認識手段である。「知覚等の生じないことが非存在なる認識手段であると認められる。それはアートマンの不転変、あるいは別の事物における認識である。(ŚV 11) (k 1648) 知覚等の五種の認識手段の生じないことが非存在なる認識手段である。そして、この知覚等の生じないことは、否定されることが意図された壺等の対象の認識の形相に転変しない休止状態にあるアートマンであり、あるいは壺等と区別される地面の認識であると言われる。

次に非存在がなぜ实在であるかが説明される。「かくして事物の非存在は認識の非存在によって理解される。そして、それは未生無等の区別によって四種に区別される。」(k 1649)³⁾ 四種の非存在とは、「牛乳において凝乳等が存在しないのが未生無 (prāgabdhāva) と言われ (ŚV 2cd), 凝乳において牛乳の存在しないのが已滅無 (pradhvaṃsābhāva) の特徴である (ŚV 3ab)。」(k 1650) 「牛における馬等の非存在が相互無 (anyoyābhāva) と言われ (ŚV 3cd), それ (牛) には他の形はない。それゆえ、それ自身によって存在しないのである。」(k 1651) 「突起して固くなっておらず平たい頭の部分は兎の角等の形としては畢竟無 (atyantābhāva) と認められる。(ŚV 4) (k 1652) 「もし、非存在が未生無等 (四種) に区別されない

ならば、原因等の区別にもとづく日常生活は成立たないであろう。(ŚV 7)」(k 1653)「これらの区別は非實在 (avastu) にとっては不可能であろう。それゆえ、非存在は實在である。結果等の非存在は原因等の存在である。(ŚV 8)」(k 1654) たとえば非存在の四種の分類が認められるとしても、どうしてそれが非存在の實在の根拠となるのかというならば、非實在には区別は不可能であり、区別は常に實在にあるから非存在は實在なのである。牛乳等の原因の存在は凝乳等の結果の非存在であり、凝乳等の結果の存在は牛乳等の原因の非存在である。このように非存在は實在である。さらにまた、「非存在は牛等のように實在として認識される。なぜならば、それは随伴 (anuvṛtti) と排除 (vyāvṛtti) の概念によって認識されるものであるから。(ŚV 9)」(k 1655) 随伴とは四種の非存在すべてにおいて、それは非存在であるという同一相の観念であり、排除とは未生無は已滅無ではないという差別相の観念である。認識対象 (prameya) であることは實在であることを意味する。實在論者にとって知識は外界の實在に対応する。實在とは認識されるものであり、言い表わせるものである。非存在が實在でなければ、すべての能力をもたないのであるから、非存在の観念もないだろうし、未生無等の非存在の区別もないだろう。

従って「いかにして非存在は認識手段であるのか(と問う)ならば、その場合、どのような認識対象であるのか(と答える)。なぜならば認識対象が否定的であるのと同様に認識手段も認められるべきである。(ŚV 45)」(k 1656)「認識手段の非存在は知覚等と区別される。なぜならば、認識対象の非存在と同様に、非存在という言葉で呼ばれるから。(ŚV 54)」(k 1657)「(対象の)非存在は自己の相に応じた認識手段で認識される。なぜならば、存在のように認識対象であるから。それゆえ、存在を本質とするものとは異ったものである。(ŚV 55)」(k 1658) すなわち、認識手段と認識対象は同じ性格のものである。認識対象は自己の相に応じた認識手段によって認識されねばならない。存在が知覚等の肯定的な認識手段によって認識されるように、対象の非存在は、非存在と言われる認識手段によって認識される。それゆえ認識手段の非存在は存在を本質とする知覚等の認識手段とは別個のものである。

以上に述べたごとく非存在の實在を認め非存在を独立した認識手段であるとする Kumāṛila の見解は、もちろん仏教徒の承認しがたいものである。「結果の非存在は原因等の存在にある。そしてこれは他のものとは異った本質をもつものであり、知覚によって理解される。」(k 1670) “結果の非存在は原因等の存在にあ

る”(k 1654)と示された。この原因等の存在は結果等とは異った本質をもつものであり、知覚によって理解される。一つの認識手段が他の認識手段の対象より別の対象をもたないときそれは異った認識手段ではない。非存在は知覚の認識対象とは異った認識対象をもたないから別の認識手段ではない。Bhāṭṭa 派は反論する「自らの形相においては有を本質とし、他の形相においては無を本質とする事物において、ある形相が、あるものによって、ある時、認識される。そして、知覚等が顕示する存在の様相が認識される時、それ(知覚等)の生じないことの働きが非存在の様相において認識しようとするのである。」(k 1671, 1672) 仏教徒は同一の事物に二つの本質があるのは矛盾であると主張する。「事物の自らの形相こそが他より排除されたものである。その本質によって存在し、この本質によってその知覚がある。」(k 1673) 事物が他の事物から排除されるのは他の形相によってではなく自らの形相によってである。また「有効な働きの能力あるものが有といわれ、他のもの(その能力のないもの)が無といわれる。この両者は同一の基体に共存することは不可能である。矛盾であるから。」(k 1674) 相互に矛盾する両者が一つのものに同時にあることはできない。光と影、寒と熱のように有と無の相は相互矛盾である、これに対して「(同一の事物が)自ら成就されるものに関して能力あるものであり、他(によって成就されるもの)に関して無能力なものであるというならば、一つの事物に二つの相はありえないというのはそのためである。もし他(によって成就されるもの)に関して能力のないものは(その能力あるものとは)別であると認めるならば、その時(能力のあるものと能力のないものとの)、二つの事物が得られ、一つ(の事物)に二つの相があるのではない。」(k 1675, 1676) Dharmakīrti は対象を有効な働きの能力のあるものとその能力のないものとに二分する。有効な働きの有能力和無能力は矛盾概念であるから、一つの対象が有能力でありかつまた無能力であることはない。無は有効な働きの能力のないものであり、非実在である⁴⁾。

Śāntarakṣita はさらに次のように批判する。「非存在が実在であることが(汝によって)以前に認められた時、なぜそれが形のないものであることが述べられるのか。」(k 1677) “認識対象が否定的であるのと同様に認識手段も認められる”(k 1656)と言われた。認識手段は対象の認識を特質とするものであるから、形のないものに認識手段を帰するのは正しくない。「形のない認識対象にとって、認識の形相が欠如している場合、認識手段であることは正しくない。なぜならば、これ(認識手段)は認識を特質とするものである。」(k 1678) 認識対象の認識の形

相のないものは認識手段ではない。非存在は認識対象の認識を欠いている。これに対して「(非存在は) 認識手段である。眼等のようにそ(の認識)の原因であるからというならば、形のないものはどんな時にも決して原因であることは可能ではない。」(k 1679) 眼等は認識対象の認識を形相とするものではないが認識対象の認識の原因であるから認識手段であるのと同様に非存在は認識手段であると主張するならば、形のないものはすべての能力の欠如を特相とするものであるから、原因として可能であるというのは正しくない。「認識の形相を離れた非存在がいかにして理解されるのか。それを境とする認識の非存在によって(認識される)というならば、そうではない、無限遡及となる。」(k 1680) “別の仕方では対象の存在しないことが非認識によって理解され、認識の存在しないことが別(の非認識)によって理解されるというのは無限遡及の過誤である⁵⁾”。これを避けるために「もし(認識される)事物の非存在によって認識手段の無があり、認識の非存在によって事物の無があるというならば、相互依存の過失となる。」(k 1681) 「それゆえ、一つのものの知覚というものが他のものの無知覚と言われる。そしてこの(知覚は) 自立的に成就する。自己の相として無感覚ではないから。」(k 1682) すなわち、一つのものの認識こそが他のものの非認識である。非存在は知覚とは別個の認識手段である必要はない。一つのものの知覚はそれ自身で自立的に成就するものであり、いかなる他のものによるのではない。それは自体として明照を自性とするものである。

“ある場所に壺がない” という判断において認識されているものは知覚によって認識された空っぽの場所だけである。それゆえ、非存在は別個の認識手段ではない。Dharmakīrti によれば壺の非存在は壺の無知覚を証相とする推理によって決定される⁶⁾。

1) Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Commentary Pañjikā of Shri Kamalaśīla, ed. by S. D. Shastri, 2 vols, (Bauddha Bharati Series, 1 & 2) Varanasi, 1968.

2) Śloka-vārttika, Abhāva 章 (ŚV)

Śloka-vārttikavyākhyā Tātparyāṭikā of Uṃveka Bhaṭṭa, ed. by S. K. Ramanatha Sastri, University of Madras, 1971. この書の序文 (p. viii) によれば、Kamalaśīla は Tattvasaṅgraha の註釈 Pañjikā に Uṃveka の名を挙げて引用していることが指摘されている。

3) この偈は ŚV には見られない。

4) 戸崎宏正『仏教認識論の研究』上巻 p. 58 以下参照。

5) Pramānavārttika of Acharya Dharmakīrti, ed. by S. D. Shastri, (Bauddha Bharati Series, 3) Varanasi, 1968, p. 454 (IV, k 275).

6) 戸崎宏正, 前掲書 p. 138 参照。

(帝塚山学院大学講師)